

アウクスブルク滞在記

木村 咲瑛

社会に出てからも、なかなかない経験であっただろう。

1. はじめに

今年4月には、尼崎市との姉妹都市提携65周年を迎えたアウクスブルクに、約一週間滞在した。ホームステイをはじめ、現地の方との多くの交流の機会は、今後一生の財産になる経験であったと振り返る。また、使節団の一員として訪れたことで、アウクスブルク市について学ぶことができただけでなく、地元尼崎市の歴史について調べ、学び、改めて尼崎市についての理解と愛着を深めることができるような良い機会でもあったと感じる。以下、9月8日から15日にかけての滞在の一週間を振り返る。

2. 日中の研修

それぞれの場所で、それぞれ学ぶことが多くあったが、特に印象に残っているのは、3日目のロココホールでの市長表敬訪問と、5日目の Halle116 である。

今回の派遣事業のメインイベントの一つともいえる副市長表敬訪問では、豪華な装飾に彩られたロココホールにて、多くの方と交流し、芳名帳への署名など貴重な経験をした。「旅の恥は掻き捨て」を胸に、英語とカタコトのドイツ語を織り交ぜながらアウクスブルクについて、また尼崎市について、普段ならば話すことができないような方々と会話をすることができたことは、



ロココホールの広間

5日目の Halle116 は、第二次世界大戦中はダッハウ強制収容所の補助施設として最大 2,000 人を収容し、戦後はアメリカ占領者によって利用され、現在はそれらについて学ぶための博物館として保存される建物である。私は以前、ブーヘンヴァルトにある強制収容所を訪れたことがあり、その時に見て感じた経験に、今回の Halle116 で学んだ詳細な数字や写真の知識が加わったことで、より、ドイツの歴史についての理解を深めることができたと思う。また、送別会の日、別のホストファミリーと強制収容所についての話になった際、触れるべきではなかったかと思った私に対して、「あなたが知ろうとしてくれたことを、よかったと思う」「私たちはドイツ人として決してこのことは忘れない、次の世代にも伝えていく」と話されたことが印象に残っている。

3. ホームステイ

日中の研修を終えた夕方ごろからは、ホストファミリーとの時間を過ごした。私のホストファミリーはフランス人であったため、常に英語とドイツ語、フランス語が飛び交う刺激的な家族で、四人の兄妹含め全員がとても暖かく迎え入れてくれた。

2日目の晩、ホストマザーは私に、「明日から、毎朝の集合場所にいろいろな方法で行って見ないか」と提案してくれた。早速翌朝には一人でトラム（路面電車）に乗って、その後は毎朝二人で、自転車に乗って住宅街や森を駆け抜けて集合場所まで向かった。そのなかで、トラムで降りる駅の名前を忘れてしまったり、自転車を漕いでいる途中で雨に見舞われたりと多少のハプニングはあったものの、拙いドイツ語と身振り手振りで道を尋ね、乗客や通行人が指す方向を頼りになんとか集合場所までたどり着くことができたことや、上着のフードをかぶり、多少の雨は気にしないドイツ人になった気分でした雨の中のサイクリングは、「私は今、アウクスブルクで生活しているぞ!」と感じさせてくれる、忘れたくない経験になった。

帰国前夜には、ホストファミリーの長女発案のもと、家族で手巻き寿司パーティを開催した。ドイツで生魚や海苔が買えるのかと不安に思っていた私をよそに、ホストマザーはアジアンスーパーを駆け回って驚くほど美味しく、具の種類も豊富で見事な手巻き寿司会を準備してくれた。もしいつか、彼らが日本を訪れることがあれば、彼らが私にしてくれたように、私も彼らに毎日がワクワクするような経験をお返しした

いと強く思う。

4. 尼崎とアウクスブルクのつながり

姉妹都市締結のきっかけとなったディーゼル記念石庭苑、'Amagasaki-Alle'（尼崎通り）や植物園内の日本庭園への訪問では、形に残るものとしての「アウクスブルクと尼崎のつながり」を見ることができた。そしてディーゼル記念石庭苑や、日本庭園の手入れが美しくなされていたことから、彼らもこの姉妹都市としてのつながりを想ってくれていること、そして今後もきっと続いていくにちがいないということを感じさせてくれた。

また、日本の好きなところを共有してもらえた時や、アウクスブルクのこういういいところを知ってもらいたいと話された時には、私人間の何気ない会話ではあったものの、自分と相手の間でアウクスブルクと尼崎市、ひいてはドイツと日本の繋がりを自分たちの間に感じる事ができた。

5. 最後に

最後になったが、今回の一週間の訪問は、何ヶ月にも及ぶ多くの方のサポートのうえに成り立っているものであり、感謝してもしきれない。今回の派遣での経験と知識を、今後は尼崎市に還元していけるよう努めたい。そして、社会に出てからは国内に留まらず、広い視野をもって社会に貢献したいと考える。